

## 15 章 情報リテラシー



## 15 章 情報リテラシー

### 15.1 情報リテラシーの定義、測定方法

木村（木村、2000）の定義では、情報リテラシーは「情報を取り扱う上での理解、さらには情報及び情報手段を主体的に選択、収集、活用、発信するための能力と意欲」である。また、宮田（2001）の定義によれば、情報リテラシーは以下の3つの能力が統合されたものである。

- ・メディア利用スキル：コミュニケーションの道具としてメディア機器を使用する能力
- ・メディア評価能力：メディア内容の解釈能力やメディアを利用した情報収集能力
- ・メディア表現能力：適切なメディアを用いて自己表現や他者との関係性を形成する能力

情報リテラシーが具体的にどのようなスキルによって構成されているのか、まだ十分な理論的・方法的枠組みが用意されているとは言えないが（木村他、2002）、木村は包括的な情報リテラシーの概念をやや限定し構成能力を明確化した「情報ハンドリング能力」の尺度を開発している（木村、2001、2002 前掲）。本調査では、情報ハンドリング尺度とキーボード操作能力の設問により回答者の情報リテラシーを測定した。情報ハンドリング尺度は以下の5つの能力をたずねる設問（アンケート調査票問 15a～e）によって構成される。

- 情報収集能力：情報を集める自分なり方法をもっている
- 情報選択能力：たくさんある情報の中から、自分の必要とする情報を取捨選択できる
- 報探索能力：関心ある情報を多少苦労しても自分であれこれ探すのが好きだ
- 情報伝達力：他人とのやりとりや仕事でのやりとりで、必要なことをきちんと相手に伝えられる
- 共創力：皆でいろいろな意見を出し合いながら新しいことを生み出すのが好きだ

上記5設問の回答データを因子分析（主因子法、固有値1.0以上）にかけた結果、固有値は2.459、寄与率49.173%の因子が一つだけ抽出された。各設問の回答を「あてはまらない」：1点から「あてはまる」：4点まで順に得点化し、合計得点を算出したものを「情報ハンドリング得点」として扱うこととする。5設問を用いた尺度のクロンバックの $\alpha$ 係数は.825であった。以後の分析では、情報ハンドリング能力得点に加え、情報ハンドリング能力を構成する各能力の得点（各々1～4点）も必要に応じて使用する。

キーボード操作能力（アンケート調査票問18）は、「キーボードをどの程度打てますか」の設問の回答を「キーボードを見ないで打てる」を3点、「ある程度早く打てる」を2点、「ゆっくりなら打てる」を1点、「ほとんど使わない」「さわったこともない」を0点と得点化したものである。

情報ハンドリング能力の「情報収集能力」「情報選択能力」「情報探索能力」は宮田（前掲）のいう「メディア評価能力」に近く、「情報伝達能力」「共創力」は「メディア表現能力」に近い。キーボード操作能力は「メディア利用スキル」の一部である。

本章では情報リテラシーを主にパソコンやインターネット利用と関連づけて分析している。前述の定義によればテレビやDVDレコーダー、ファクシミリ等の使用スキルも情報リテラシーに含まれるが、パソコンやインターネットの普及とともに情報リテラシーへの社会的関心が高まり、情報通信白書等ではこれらの教育等とセットにして語られることが多いことから本章でも当該用法に従った。

学校や企業で情報教育が行なわれているが、以前と比べて情報リテラシー能力は伸びているのだろうか。通信総合研究所と東京大学社会情報研究所の共同研究グループが2002年と2003年に実施した「インターネットの利用動向に関する実態調査」結果でも情報ハンドリング尺度を用いて情報リテラシーをたずねているので、3つの調査における得点を比較した（表15.1.1）。

JWIP2002、JWIP2003 調査はともに「インターネットの利用動向に関する実態調査」の2002年版、2003年版、IBM2005 調査が本調査である。なお、JWIP 調査のサンプルは12～74歳であるため、本調査に合わせ

て13～69歳までのデータを用いて情報ハンドリング得点を算出した。この数値を見る限り、情報ハンドリング尺度で測定される情報リテラシーはわずかながら伸びているようである。

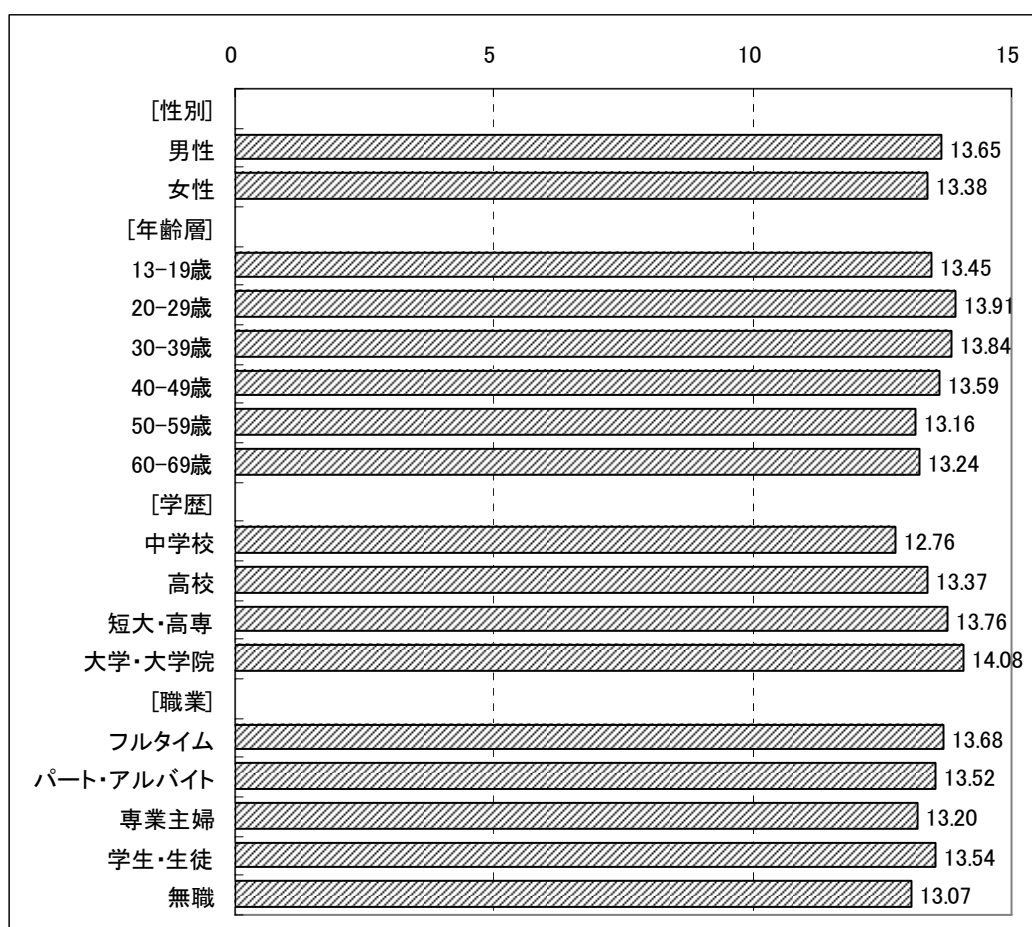
表 15.1.1 情報ハンドリング能力得点の経年変化（単位：点）

	JWIP2002 調査	JWIP2003 調査	IBM2005 調査
情報収集能力	2.23	2.35	2.50
情報選択能力	2.57	2.57	2.77
情報探索能力	2.45	2.52	2.71
情報伝達能力	2.86	2.73	2.85
共創力	2.54	2.49	2.68
情報ハンドリング能力計	12.67	12.67	13.51

## 15.2 情報リテラシーとデモグラフィック属性

情報ハンドリング能力やキーボード操作能力を属性別にみると、どのような差異があるだろうか。図 15.2.1 はデモグラフィック属性別に情報ハンドリング能力の平均値を比較したものである。性別を t 検定により、年齢層、学歴、職業を一元配置分散分析によりそれぞれ平均の差の検定を行なったところ、性別 ( $t=2.605$ ,  $p<0.01$ )、年齢層別 ( $F=6.182$ ,  $p<0.001$ )、学歴 ( $F=19.497$ ,  $p<0.001$ )、職業 ( $F=4.303$ ,  $p<0.01$ ) すべてで統計上有意な差異が認められた。

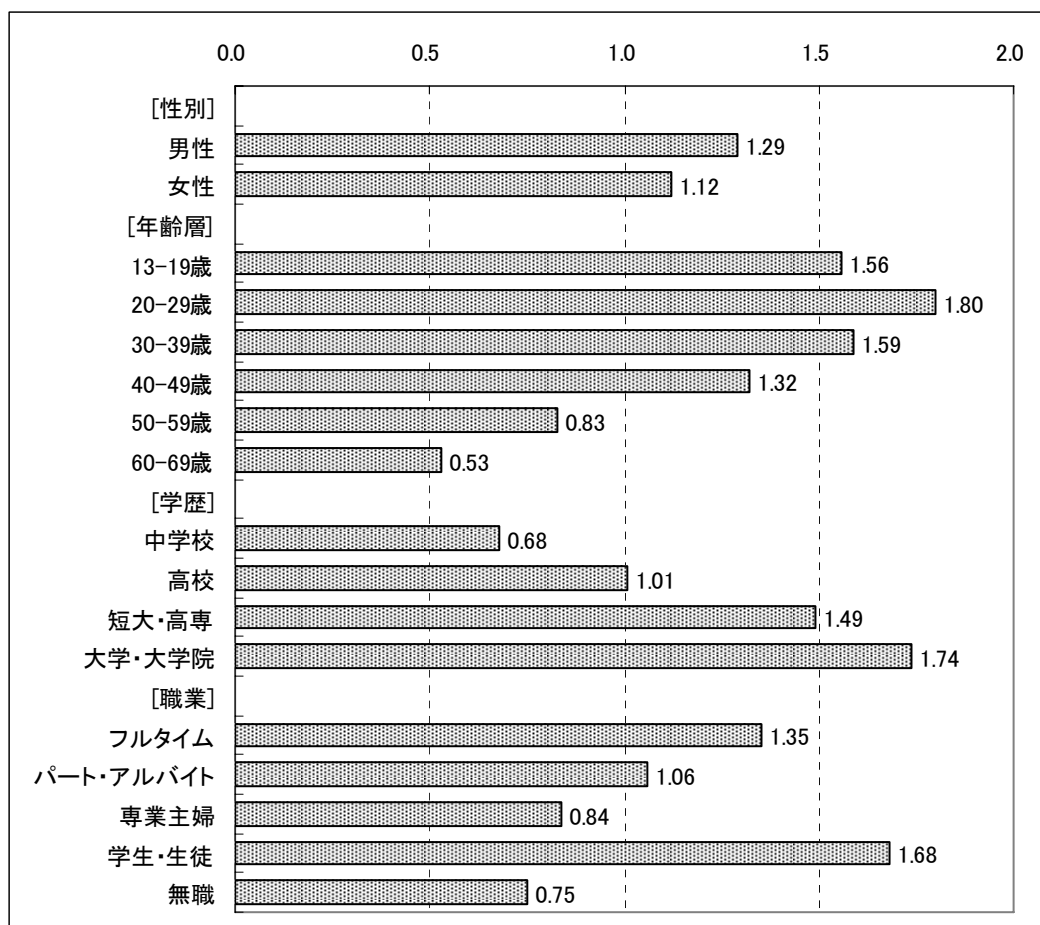
図 15.2.1 デモグラフィック属性別情報ハンドリング能力（点）



同様にキーボード操作能力の平均値をデモグラフィック属性別に比較したものが図 15.2.2 である。性別を t 検定、年齢層、学歴、職業を一元配置分散分析により平均の差の検定を行なったところ、性別 ( $t=3.813$ ,  $p<0.001$ )、年齢層別 ( $F=104.147$ ,  $p<0.001$ )、学歴 ( $F=95.887$ ,  $p<0.001$ )、職業 ( $F=43.551$ ,  $p<0.01$ ) すべてで統計上有意味な差異が認められた。

情報ハンドリング能力ならびにキーボード操作能力の平均値とデモグラフィック属性との関係は概ね似た傾向を示している。つまり、性別にみると男性が女性より得点が高く、年齢層では 20 歳代が最も高く、年齢が高くなるにつれて低下している。学歴が高くなるにつれて得点も高くなり、職業別ではフルタイムや学生の得点が高く、専業主婦と無職の得点が低い。

図 15.2.2 デモグラフィック属性別キーボード操作能力 (点)



さらに情報ハンドリング能力とキーボード操作能力を従属変数、デモグラフィック属性を独立変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行なった (表 15.12.1)。職業に関してはフルタイムだけを 1 (フルタイム)、0 (フルタイム以外) の 2 値変数化して独立変数に加えている。結果、情報ハンドリング能力やキーボード操作能力に大きな影響を与えているのは年齢と学歴であることがわかった。年齢が若いほど、学歴が高いほど情報ハンドリング能力もキーボード操作能力もともに高くなる。

表 15.2.1 情報ハンドリング能力、キーボード操作能力を  
従属変数とする重回帰分析（標準偏回帰係数）

	情報ハンドリング能力	キーボード操作能力
性別	-.030	-.030
年齢	-.093***	-.415***
学歴	.126***	.287***
フルタイム	.020	.102***
世帯年収	.071	.057**
R <sup>2</sup>	.041***	.315***

\*:p<0.05、\*\*:p<0.01、\*\*\*:p<0.001

情報ハンドリング能力得点を構成する各能力とデモグラフィック属性の間における Spearman の順位相関係数を示したものが表 15.2.2 である。ここでは職業のフルタイムと学生を 2 値変数化してともに分析に用いた。

相関分析の結果は概ね男性であるほど、年齢が低いほど、学歴が高いほど、フルタイムまたは学生であるほど、世帯年収が多いほど能力の得点が高い。但し、情報伝達力の相関係数を見ると、年齢が高いほど得点が高く、学生であるほど得点が低くなっている。情報伝達力を問う「必要なことをきちんと相手に伝えられる」という設問では、メディアを使いこなす能力よりむしろ、一般的なコミュニケーション能力を測定しているようである。

表 15.2.2 グラフィック属性と情報ハンドリング能力との相関

	情報収集力	情報選択力	情報探索力	情報伝達力	共創力
性別	-.120***	-.088***	-.081***	-.059**	-.051*
年齢	-.204***	-.174***	-.218***	.055*	-.066**
学歴	.238***	.246***	.198***	.093***	.107***
フルタイム	.124***	.087***	.060**	.117***	.042
学生	.090***	.057*	.085***	-.097***	.034
世帯年収	.151***	.143***	.114***	.077**	.089***

数値は順位相関係数 \*:p<0.05、\*\*:p<0.01、\*\*\*:p<0.001

### 15.3 情報リテラシーとメディア利用状況

情報リテラシーは情報メディアを使いこなして情報収集やコミュニケーションに役立てる能力であるから、情報リテラシーが高い人々は新しい情報機器・メディアの利用に積極的であり、利用時間も長いと考えられる。

パソコン（自宅利用）、携帯電話（自宅利用）、パソコンによるインターネット、携帯電話によるインターネットの4つの情報機器・メディアを取り上げ、それぞれ利用・非利用の別に情報ハンドリング能力とキーボード操作能力の平均得点を比較した（図 15.3.1、15.3.2）。結果はいずれの情報機器・メディアについても、推測どおり利用者の方が非利用者よりも 0.001%水準で統計上有意に高い平均得点を示した（t 検定結果）。

図 15.3.1 メディア利用別情報ハンドリング能力

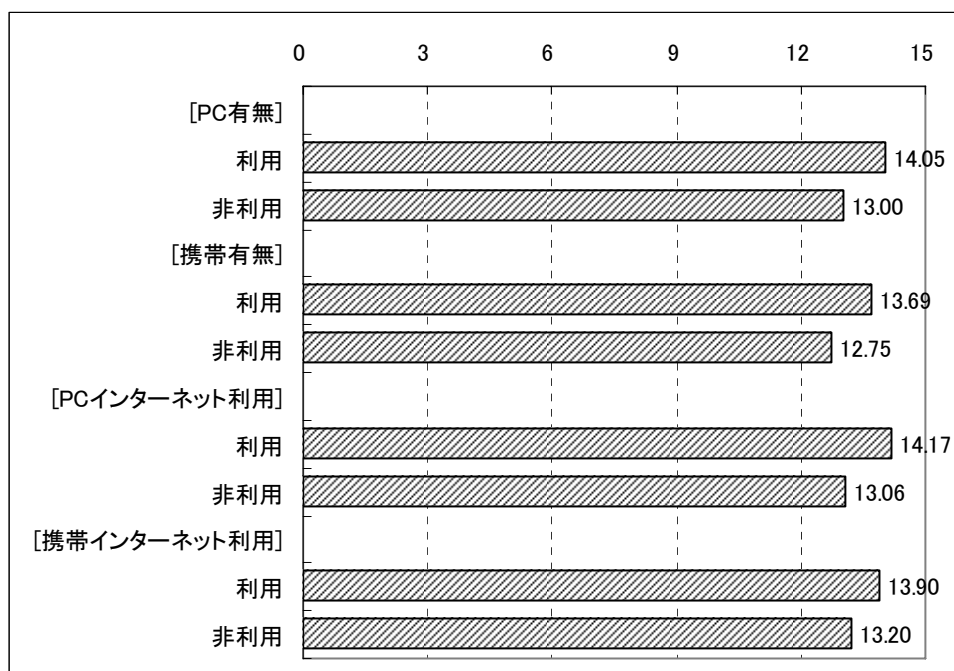
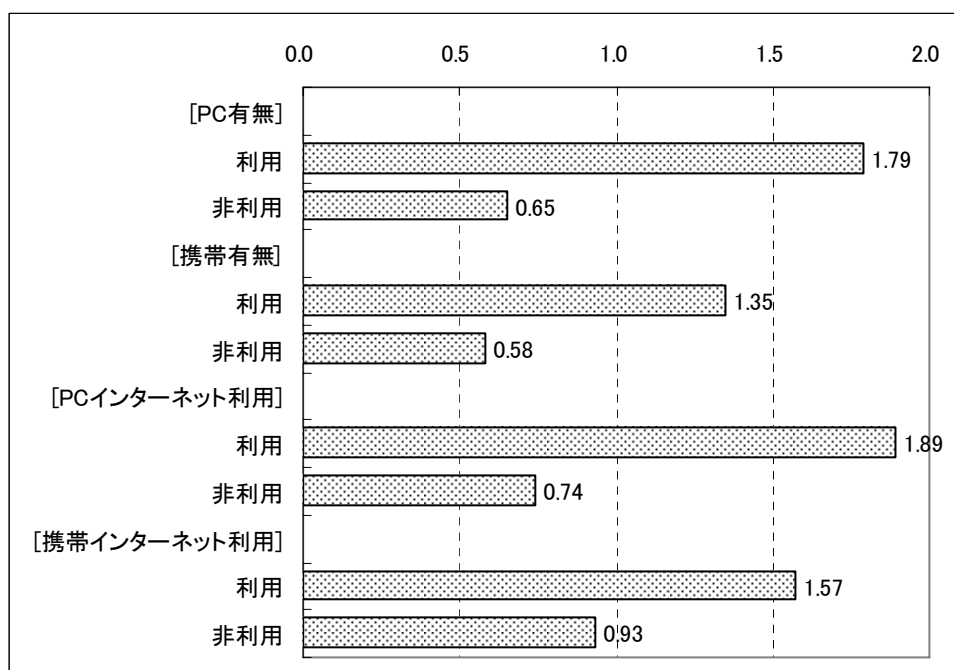


図 15.3.2 メディア利用別キーボード操作能力



次にテレビ・新聞・インターネットの1週間の利用時間と情報ハンドリング能力・キーボード操作能力間でPearsonの積率相関係数を算出した(表15.3.1)。新たなメディアであるインターネットの利用時間は、予想通り情報ハンドリング能力・キーボード操作能力と正の相関関係にあった。しかしテレビ視聴時間は情報ハンドリング能力と統計上有意な相関がなく、キーボード操作能力はテレビ視聴時間・新聞閲読時間と負の相関関係にあった。

テレビ視聴時間、新聞閲読時間とパソコン利用の順位相関係数はそれぞれ-.121(0.01%水準で有意)、-.050(5%水準で有意)と負の相関関係にある。キーボード操作能力はパソコン利用と非常に強く相関しているため(順位相関係数が.592、0.01%水準で有意)、テレビ視聴時間や新聞閲読時間が長い人々はパソコン保有率が低いいためキーボード操作能力が低いと考えられる。

表 15.3.1 情報リテラシーとメディア利用時間との相関

	情報ハンドリング能力	キーボード操作能力
TV 視聴時間	-.012	-.102***
新聞閲読時間	.055*	-.145***
インターネット利用時間	.123***	.220***

数値は積率相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

では、テレビ視聴時間と情報ハンドリング能力は互いに無関係なのであろうか。テレビ視聴時間と情報ハンドリング能力との関係をより詳しく調べるため、情報ハンドリング能力を構成する各能力とメディア利用時間との順位相関係数を示したものが表 15.3.2 である。

情報収集力、情報探索力とテレビ視聴時間とは負の相関関係にある。インターネット利用時間とそれらの能力が正の相関関係にあることを勘案すると、テレビは受動的な視聴を行なうメディアであるため、テレビの長時間視聴者は自ら積極的に情報を探索し収集する能力を必要としていないと考えられる。一方、インターネットは利用者が積極的に情報を取りにいかねばならず、情報の真偽も自ら判断しなければならないため、利用者には情報収集力・情報探索力に加えて情報選択能力が求められるのである。

新聞は利用の仕方が能動的か受身かという点では、インターネットとテレビの中間的な存在であろう。また、情報伝達力や共創力と正の相関があることは、他者とのコミュニケーション能力が高い人が新聞を長時間閲読する傾向があると推察される。

表 15.3.2 情報ハンドリング能力とメディア利用時間との相関

	情報収集力	情報選択力	情報探索力	情報伝達力	共創力
TV 視聴時間	-.071**	-.028	-.055*	-.022	.002
新聞閲読時間	-.009	.002	.001	.072**	.053*
インターネット利用時間	.209***	.174***	.250***	.023	.055

数値は順位相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

## 15.4 情報リテラシーとセキュリティ意識

情報リテラシーが高いインターネット利用者は、個人情報の漏洩のようなリスクを不安に感じているであろうか、それともリテラシーの高さが一種の自信となってあまり不安に感じていないのであろうか。

表 15.4.1 にはインターネット利用に伴うリスクについてたずねた設問（アンケート調査票問 14）への回答を「非常に不安を感じている」：5 点～「まったく不安を感じない」：1 点と得点化し、情報ハンドリング能力およびキーボード操作能力との順位相関係数を記載している。

「個人情報の漏洩」「コンピュータウィルス」「データ盗難・改ざん」は情報ハンドリングならびにキーボード操作能力の得点が高い人ほど不安に感じている。一方、「閲覧情報の漏洩」「誹謗中傷」「デマ・有害情報」については、キーボード操作能力の得点が高くパソコンやインターネット機器を使いこなせる人は、比較的的不安を感じていない。



表 15. 4. 1 情報リテラシーとインターネット不安との相関

	情報ハンドリング能力	キーボード操作能力
閲覧情報の漏洩	.025	-.076**
個人情報の漏洩	.112***	.083***
コンピュータウイルス	.096***	.130***
データ盗難・改ざん	.087***	-.006
高額請求	.007	-.051*
誹謗中傷	-.037	-.174***
デマ・有害情報	-.040	-.164***

数値は順位相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

情報ハンドリング能力を構成する能力別にインターネット不安との順位相関係数を調べたものが表 15. 4. 2 である。この表でも表 15. 4. 1 と同様に、能力が高い人ほど不安に感じる項目と、能力が高い人ほど不安を感じていない項目がある。

情報ハンドリング能力とインターネット不安との関係は、大別すると以下の2パターンに分けることができそうである。

①システムトラブルへの不安

「個人情報の漏洩」「コンピュータウイルス」「データ盗難・改ざん」がこれに該当する。

これらの被害は悪意を持った他者からの攻撃やインターネットサービス企業の過失等によって生じる可能性があり、インターネット利用者がいくら注意していても防ぎきれない場合がある。したがって情報リテラシーが高くこれらの被害の危険性をよく知る人ほど、不安に感じると考えられる。

②コミュニケーショントラブルへの不安

「誹謗中傷」「デマ・有害情報」が該当する。

これらの被害は利用者のインターネット上のコミュニケーションスキルや情報の真偽を見分ける能力等によって回避することが比較的容易である。したがってキーボード操作能力が高くインターネット利用時間が長いと考えられる人、情報収集力・情報選択力・情報探索力が高くインターネット上の情報をうまく扱う自信がある人は、これらの被害に対する不安は小さくなると考えられる。

表 15. 4. 2 情報ハンドリング能力とインターネット不安との相関

	情報収集力	情報選択力	情報探索力	情報伝達力	共創力
閲覧情報の漏洩	-.039	-.013	-.011	.048*	.011
個人情報の漏洩	.049*	.079***	.104***	.084***	.075**
コンピュータウイルス	.083***	.099***	.096***	.062*	.084***
データ盗難・改ざん	.018	.046*	.058**	.084***	.070**
高額請求	-.045*	-.033	-.002	-.001	.008
誹謗中傷	-.082***	-.084***	-.071**	.007	-.019
デマ・有害情報	.107***	.123***	-.080***	-.013	.004

数値は順位相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

## 15.5 情報リテラシーとメディアへの信頼性・有効性

15.4 節ではインターネットの利用に伴う不安と情報リテラシーの関係を見たが、本節ではさらにメディアの信頼性・有効性への意識全般に考察の範囲を広げることとしたい。

アンケート調査票ではテレビ、新聞、週刊誌、インターネットの各メディアに対する信頼性、情報源としての重要性、娯楽手段としての重要性を5点尺度でたずねている(問11~13)。それら設問への回答データを「全部信頼できる(非常に重要)」:5点~「まったく信頼できない(まったく重要でない)」:1点と得点化し、情報ハンドリング能力との順位相関係数を算出した。

表15.5.1では情報ハンドリング能力およびキーボード操作能力とメディアの信頼性・有効性との順位相関係数を比較している。

表 15.5.1 情報リテラシーとメディア信頼性・有効性との相関

	情報ハンドリング能力	キーボード操作能力
テレビ信頼性	-.011	-.083***
新聞信頼性	.034	-.025
週刊誌信頼性	.003	.025
インターネット信頼性	.058*	.132***
テレビ情報源重要度	.016	-.032
新聞情報源重要度	.046*	-.095***
週刊誌情報源重要度	-.015	.003
インターネット情報源重要度	.176***	.379***
テレビ娯楽手段重要度	.018	.007
新聞娯楽手段重要度	.002	-.208***
週刊誌娯楽手段重要度	.009	.045*
インターネット娯楽手段重要度	.200***	.461***

数値は順位相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

情報ハンドリング能力とメディア信頼性・有効性との関係では、能力が高くなればなるほどインターネットへの信頼性が高くなり、情報源としても娯楽手段としてもインターネットの重要度を高く評価している。

一方、キーボード操作能力が高い人ほど、インターネットへの信頼性・重要度を高く評価している点は変わらないものの、テレビの信頼性ならびに新聞の情報源・娯楽手段としての重要度を低く評価している。キーボード操作能力はパソコン等の利用に限定した「メディア利用スキル」(宮田、前掲)であるから、パソコンの利用に習熟している人はインターネットの利用に積極的・好意的である反面、従来メディアに対する評価が低くなっていると考えられる。

では、情報ハンドリング能力をより詳しく見ていくと、メディア信頼性・有効性とどのように関係しているのだろうか。表15.5.2では情報ハンドリング能力を構成する各能力とメディア信頼性・有効性との順位相関係数を記している。

表 15.5.2 情報ハンドリング能力とメディア信頼性・有効性との相関

	情報収集力	情報選択力	情報探索力	情報伝達力	共創力
テレビ信頼性	-.028	-.034	-.030	-.001	.012
新聞信頼性	-.021	.010	-.008	.044*	.035
週刊誌信頼性	.037	.019	.041	-.025	.007
インターネット信頼性	.085***	.048*	.103***	.023	.054*
テレビ情報源重要度	-.010	.006	-.001	-.008	.024
新聞情報源重要度	-.019	-.003	-.003	.073**	.049*
週刊誌情報源重要度	.019	-.015	.014	-.032	.007
インターネット情報源重要度	.288***	.244***	.287***	.064**	.126***
テレビ娯楽手段重要度	.017	.015	.025	-.015	.025
新聞娯楽手段重要度	-.062**	-.058**	-.070**	.051*	.038
週刊誌娯楽手段重要度	.087***	.035	.057*	-.036	.044*
インターネット娯楽手段重要度	.314***	.274***	.327***	.051*	.148***

数値は順位相関係数 \*: $p<0.05$ 、\*\*: $p<0.01$ 、\*\*\*: $p<0.001$

情報収集力・情報選択力・情報探索力とメディア信頼性・有効性との関係はキーボード操作能力と概ね同じ傾向を示している。それらの能力が高い人ほど、インターネットの信頼性・重要度に対する評価が高くなる一方で新聞の娯楽手段としての重要度が低くなっている。上記 3 能力以外では情報伝達力の高い人ほど、新聞に対する信頼性と情報源・娯楽手段としての重要度への評価が高い。共創力の高い人ほど、新聞の情報源としての重要性を評価している。

以上の分析結果をまとめると、情報ハンドリング能力を構成する能力のうち、情報収集力・情報選択力・情報探索力はインターネット利用と親和性が高い能力であり、情報伝達力や共創力は比較的従来のメディア利用とも親和性がある能力である。前 3 者と後 2 者の区分は、宮田のいう「メディア評価能力」と「メディア表現能力」に概ね対応していることから、メディアを利用した情報収集の局面ではインターネット利用能力や利用意向の多寡が大きく影響し、メディアを活用した他者との関係形成局面では新聞など従来メディアの利用する能力も寄与していると言い換えることができる。

木村忠正 『オンライン教育の政治経済学』 NTT出版 2000年 pp.229-232

木村忠正 『デジタルデバインドとは何か』 岩波書店 2001年 pp.260-261

木村忠正、橋元良明、辻大介、石井健一、金相美 「インターネット・パラドクスの検証」

『東京大学社会情報研究 調査研究紀要』 NO.18 東京大学社会情報研究所 2002年 pp.396-446

宮田加久子 「情報ネットワーク社会に求められるメディア・リテラシー」『明治学院論叢』 第658号

(社会学・社会福祉学研究第109号) 2001年 pp.1-35

